（十八）吉（きち）の夜泣き

暑い夏のことさら暑い夜、犬の吉が鳴く。

ハテ、どうして吉が？

元々この家の犬どもは、人間にはたとえ初対面でも吠えずに尻尾を振って歓迎して、およそ番犬にはならないが、よその犬が通りかかると「俺の領域内に入ってくるな」とやかましく吠える。ことに雄のジョンがよく吠えるが、雌の吉はわりにおとなしい。

そのおとなしいハズの吉が、深夜になってから延々と鳴く。それもキャン、キャイーンと「泣く」ようである。

これは、黙って我慢しきれない異常が、何かあるということだ。

可哀そうに。

どこか痛いのか？

それともダニか何かで痒（かゆ）いのか？

この 2 匹は外飼いで、小屋の周りは草だらけ。散歩に行く先は芝畑と畔（あぜ）道、その周りは藪（やぶ）とあって、ダニが喰いつくには最適の環境である。

女房は犬を飼い始めるまで、ダニという悪名高い生き物の姿を見たことがなかった。血を吸ってまん丸に膨れるとダニは小豆（あずき）ほどの大きさになるが、血を吸う前は胡麻（ごま）粒ほどの小ささである。色は灰色がかった茶色。

子どものころ家に犬がいたという亭主に教えてもらって初めて、女房はこれが「あの」ダニかと知った。が、それを素手で引っ張って取るなんて、最初は気味悪くてとてもできなかった。恐いもの知らずのこの女房だって、何でも初めから平気だったわけではない。

しかし「ダニのように一度喰いついたら離れない」という言葉通り、女房が軍手をはめた手で恐るおそる引っ張ったくらいでは、ダニは取れない。エイヤと犬の皮膚ごとむしり取るくらいの覚悟が必要である。

女房がダニを素手でむしりとってつぶすという「勇気」あるいは「鈍感力」（？）を得るまでには、数カ月かかった。

環境が環境だけに、犬のダニを全滅させるのは容易なことではない。

犬小屋の周りの草を亭主が草刈り機で刈っても刈っても、すぐ草は伸びる。

2匹の犬が夏になるとしょっちゅう後ろ足で体を掻き、時には自分の尻尾のあたりに噛みついているのは、ダニで痒い証拠である。

ウ～ン、これはほうっておけないよね。

女房は毎朝散歩のたびに立ち止まって丹念に2匹の犬のダニを取る。

ダニも命がかかっているから、取られにくい場所をよく承知していて、犬の腋（わき）の下あたりに密集している。冷静に考えると四つ足の犬に「腋」があるかと思うが、前足のつけ根のあたりは多少足を持ち上げさせなければ人間に見えないから、犬のダニ取りをしたことのある人ならたぶんみな、「犬の腋の下」という言葉に納得するだろう。

女房が不思議なのは、「犬は草薮（やぶ）でダニを拾ってくる」という定説からすると、犬に喰いつくまで、肉食のダニは草薮で何を食って生きているのか、ということである。

誰かこの謎を解いてください。

亭主はスポイト式の殺虫剤を買ってきて2匹の犬の首の後ろにつける。能書きには全身に効くとあるが、どう見てもダニの数が減ったようではない。

毎週末に2匹の犬をダニ取りシャンプーで洗い、そのついでに亭主と女房のふたりがかりでダニを取る。亭主は片手で首輪をつかんで犬を固定し、嫌がれば叱りつけ、もう片手でダニを取る。いっぽう女房は「腋の下」から腹の下、尻尾まで丹念に毛を掻き分けてダニを取り、バケツの中のシャンプー混じりの水につけて殺す。

この時ジョンから取れたダニの数は、なんと約100匹。

ハァ。

なんとまぁ。

さぞ痒かったろうねぇ。

さすがにその次の週からは、ダニの数が順調に減っていった。

しかし、なかなか全滅には至らない。

そのうち、マダニが媒介するウイルスで人が死んだというニュースが出た。

ゲゲッ。

マダニってこの犬のダニだよね。あたしらもそのうち熱出して死ぬるんかしらん？

でも、女房にはダニに喰いつかれた記憶がない。

亭主も「あんたダニに喰われた記憶ある？」と聞かれて首を振る。

「うーん、まだよくわかってないんだよね、マダニのウイルスがどうして人間に移ったか。ダニの血経由かねぇ。ま、どっちみち人間、一度は死ぬんだし、今心配しても始まらないよ」研究者の亭主は冷静である。

「うん。そうだね」。能天気な女房もすぐに納得した。

吉はジョンと違っておとなしいからあまり抵抗せずにダニを取らせる。その年は、ジョンにやたらとダニがついていたわりに、吉にはさほどついていなかった。が、吉は皮膚病になったことがあるように、アレルギーの気（け）がある。散歩の時に立ち止まってボリボリ掻いている回数は、ジョンより吉のほうがよほど多いのである。女房と同じ「痒がり」、つまり他の人や犬より痒みを強く感じる体質だろう。掻きむしってあちこち血まで出ているのも女房と同じである。

ウ〜ン、ちょっと可哀そう。

痛いのもいけないけど、痒いのもツライものだ。女房にはよくわかる。

だから、吉の夜泣きは、ひょっとして痒いせいではあるまいか？

ただ、なぜ昼間は泣かないのに夜、それも深夜にだけ泣くのかがわからない。

夜中に女房が吉のところに行っても、暗くてダニは取れない。せいぜい「どうしたの、吉？ いい子、いい子、泣かないで」と撫でてやるのが関の山である。次の

晩は疲れていた女房が大学生の柔道部の次男に頼んだところ、なんと吉の前足を持ってブンブン振り回したと言う。

「エ、振り回すなんて、そ、それはないんじゃない？」

「ほいじゃが、泣き止んだで」

「……もうあんたには頼まん」

毎日女房は散歩の際にダニを探して取り、週末にはまた夫婦してシャンプーとダニ取り、スポイト式殺虫剤を繰り返す。が、それだけ努力しても、吉の夜泣きは週に三度ほどの割合で続く。

こういう時は「犬が人間の言葉をしゃべってくれたら」と亭主も女房もつくづく思う。どこがどう悪いか説明してくれたら、すぐどうにかしてやれるのにねぇ。

夜泣きは近所迷惑でもある。

たまりかねた女房は獣医に連れて行った。神社下の低料金の獣医は若いのに脳卒中で急死してしまったから、一番近いとは言え、なじみのないところである。

「犬の夜泣き？」

ニキビ跡の残る若い獣医の目は点になり、口はポカンと開いた。

自分の耳を疑った様子である。

「犬が夜泣きして困るって言うんですか。何が原因ですか」

「それがわからないから教えてもらいに来たんだけど」

「飼い主さんにわからないものが僕にわかるわけはありません」

「……あなた動物専門の医者でしょ」

「確かに僕は獣医です。そりゃね、犬も高齢になると認知症になって夜泣きすることあります。だけどこの子はまだそんな齢じゃないです。……アノ、こんな高齢じゃない犬が夜泣きするってのは、イヤ、全然、僕は聞いたことありません」

困った医者は棚から専門書を出してめくり始めたが、「夜泣きについて書いてはありません」。

なんとまぁ、頼りにならない青二才だこと。

これじゃせっかく来た甲斐（かい）がないじゃないの。

ともあれ医者は真剣に犬の全身を診察し、ダニに咬まれた痕はさほどひどくない、と断言した。

「じゃ、どうしたらいいのよ？」

「それです、対症療法しかないと思います。鎮静剤を試してみますか？」

やっと女房と意見が一致した。

女房も眠り薬をのませるしかない、と思っていたのである。

早くそう言えばよかった。

「ただし、鎮静剤は効き過ぎるとコワイです。犬が永久に目覚めないこともないとは言えないので、どうしても夜泣きを止めない時だけ、必ず少量で始めてください。それで効かなかった時は、もう一度だけはのませてもいいですが、それ以上はダメです」と真顔で医者は告げた。

のませ始めるのが、夜泣きがどうしても止まらず 1 時間続いた後の 12 時、それでも泣き止まずに二度目にのませるのが 1 時。

泣く犬は可哀そうだが、飼い主も寝不足になる。

そのうちに夏は去り、吉の夜泣きは終わった。

終わってみれば、その夏は 100 年に一度という記録的な猛暑だった。

地球温暖化の影響が犬の夏バテから夜泣きにまで至ったのかどうか、原因は未だに謎のままである。

女房はほぼ毎日、亭主は会社勤めのない週末、犬と 30 分ほど散歩に出る。

女房によると、散歩の効用はふたつある。

ひとつは運動で、「中年のメタボ防止にウォーキング」と言うが、ただ健康にいいからというだけでは、とても毎日続けられるものではない。「風邪をひいた」、「疲れてる」、「今日は雨」、「今日は寒い」と、いくらでもサボる理由はつけられる。が、犬がいてはトイレのためもあり、毎日ガンバッテ散歩に出ざるを得ない。

中高年の皆さん、健康のために犬を飼いましょう。

最近、女房は若い時分からの低血圧がひどくなった。上が 90 で下が 60 という血圧は、太目で短気、かつパワフルな女房におよそ似つかわしくないが、事実である。先日のメタボ検診での血圧はさらに低く、上が 80 に下が 50 だった。

しかし、上には上がいるもので、かかりつけの医者は「僕なんかもっと低いですよ」と言う。

「先生が？ いくつくらい？」

「この間の暑かった夏、ダルイなぁ、と思ったら上が 70 に下が 40」

そういえばこの先生はいつも気だるげで、ボソボソと話す。患者の話によく耳を傾け、よく説明もしてくれるところがいいのだが、「それで先生よく生きていますね」という言葉を女房はかろうじてのみこんだ。

低血圧がひどくなると同時に、女房は若いころからの冷え症もひどくなった。冬は靴下を昼も夜も 2 枚はき、夏も夜だけは靴下をはかないと眠れない。10 月から 4 月まではスカートがはけない。

5 月になってやっと長めのスカートをはいて、柄にもなく女房がシャナリシャナリと歩いていると、スカートがサラサラと足にまつわるたび、「女してる」という感じがする。気分がいい。

女房だって一応は女である。

体が冷えるということは、体が作り出す熱量が減っているということで、中高年になると筋肉量が減って基礎代謝が減るのだ、と新聞に載っていた。日常的なカロリー消費量の 3 分の 1 は、体温維持に使われているという。つまり、女房のように冷え症の人間は、冷え症でない人間よりも日常的なカロリー消費が少ないわけで、その分（たぶん）太りやすい。

踏んだり蹴ったりである。

運動すると一時的であれ、体は温もり、血圧は上がる。

が、歩いている際、主に使っているのは足である。しかし、女房が太いのは上半身、特に胴体で、「じゃが芋にマッチ棒刺したような」体型である。

だから女房は犬と芝畑に出ると、人気がないのを幸い、腕を左右に振り回してウエストをひねりながら歩く。仕事で凝った肩と背中をほぐすためには、正拳（せいけん）突きの真似をしては肘（ひじ）を目一杯後ろに引く。果てはコンサートに行った若いもんがライトを振り回すように、両腕を上に伸ばして左右に振ったりしている。他人が見たらマチガイなく笑える光景だと思うが、たぶん、見ている人はいない（ということにしている）。

効果あって、ウエストは 10 年前に比べて 5 センチくらい細くなった（と思う）。腕も背中も（たぶん）痩せた。

止められませんね。この散歩。

犬との散歩のふたつ目の効用、いや楽しみは、自然の美しさである。

秋に色づく烏瓜（からすうり）の実、露草（つゆくさ）の群生、夏の夜に咲いて朝にはしぼむ、白いレースかフリンジのついたような不思議な烏瓜の花、芝生に輪をかいて生える茸（きのこ）。

どれも都会では見られないでしょ？

あ、ということは散歩の効用というだけじゃなくて、田舎に住む効用でもあるわね。

肥満に悩む皆さん、田舎に住んで犬を飼いましょう！